



河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

教育を 読む



『世界のなかの日本
—十六世紀まで遡って見る』

司馬遼太郎
ドナルド・キーン 著
中公文庫
定価 590 円+税

表題からもわかるように、前半は主に徳川幕府の鎖国時代の日本国の文明批評である。徳川時代は何と言っても、265年間におよぶ平和が続いたことは、世界的にも屈指であろう。その間ヨーロッパでは三十年戦争をはじめ、幾多の戦乱がおきている。

平和であるということは、さまざまな文化が開花していくことである。文学の世界では松尾芭蕉や与謝蕪村の俳諧や詩、西鶴らによる浮世草子や人形浄瑠璃などの文芸・演劇。さらにヨーロッパでは「ジャパン」として珍重された漆器や陶器などなど。そして浮世絵。

浮世絵についてキーンは興味深い話をする。「パリの現代美術館に有名な画家の一人ひとりのコーナーがあり、その真ん中に彼らのアトリエ

にあったものが保存されていますが、すべての人のアトリエに、浮世絵がありました。ゴッホなどは浮世絵をはっきりとまねています」

また江戸時代の教育水準の高さについても触れられている。女性がよく本を読むので幕末期には女性向けの本が多く書かれたそう。もちろん背景としては公的教育機関ではない、民間の自然発生的な寺子屋が盛んであったことがあるのだが。これも世界的に刮目すべきであろう。

ただし江戸人はおっとりしていて、長崎の出島を通じて西欧事情は入って来ており、「地動説」などというコペルニクス的大発見も伝えられているのだが、江戸人の反応は「あっそう」であったそう。

しかし明治に入るとそれではすまなくなる。「近代」や「科学」と本

格的に立ち向かわざるをえなくなるのだ。

本書の後半では、明治の人々が西欧文化・文明とどのように向き合ったかについて、三つのパターンが語られる。

一つ目は拒否する。

二つ目は、採用はするけれども抵抗を示す、として夏目漱石の屈折した例が挙げられる。

三つ目は、外国の影響を喜んで受けるというような人たちで、自然科学者で味の素の発明者の池田菊苗や、森鷗外などの例が示される。

本書は対談形式で読みやすいが、さまざまな示唆に富む内容で満ちている。

キーンの話の中で、「私が日本語で講演した後でも、英語で話してくる人がいます」は笑わせる。